

2021 年度ミニ観察会 ー少人数でじっくり観察しようー

生田緑地の自然観察

マユタテアカネやガビチョウに出会ったミニ観察会

コロナ禍のため自粛していた観察会を、2021 年 10 月 9 日（土）に 2 年ぶりに再会しました。ただし今回は、少人数（15 名）を募集、担当講師 1 名（唐沢）、担当スタッフ 1 名（櫻）による「ミニ観察会」です。少数でじっくり観察するという新企画であり成否の間われる観察会でもありました。

フィールドは川崎市多摩区の「生田緑地」です。小田急電鉄向ヶ丘遊園駅より徒歩 6～7 分。多摩丘陵の自然と合掌造りの民家、美術館などを含む川崎市の総合公園で、面積約 180ha もある広大な緑地です。

9 時 45 分東口ビジターセンター集合、10 時枡形山展望台を目指して出発。一般道をのぼりながら植物、昆虫、鳥など秋の自然を楽しみました。主な観察内容は次の通りです。

※このレポートで掲載した写真は記載したメンバーまたは NPO 法人自然観察大学およびその関係者のものです（禁無断転載）

●サルビアとヌスビトハギ

最初に注目したのはビジターセンター横に咲いているサルビアの花。

サルビア (*Salvia*) は世界で約 90 種類ほど知られており、日本ではアキノタムラソウ *Salvia japonica* が代表例です。

ハチドリが吸蜜しようとサルビアの花に嘴を挿入すると、雄しべが下がり鳥の頭部に花粉が付着して送粉されます。そのハチドリの生態について拙著『コスタリカの鳥と自然』を紹介し、送粉や受粉の仕組みを模型で確認しました。



ヌスビトハギとアレチヌスビトハギの果実を観察

登り道にそってヌスビトハギの群落を観察。

ちょうどこの季節は果実が沢山ついています。2 節の果実の形から盗人萩の名がつけられ、人の衣服などに付着して運ばれるひつつき虫（動物散布）です。

ズボンを見ると、偶然にも 4 節、5 節の果実が付着していました。北米原産のアレチヌスビトハギでした。ヌスビトハギ（在来種）とアレチヌスビトハギ（帰化植物）の園内での分布の違いについても考えてみました。



菖蒲園では、縄張りを構えているマユタテアカネ(雄)を捕らえ顔や腹部の先端などを観察

●マユタテアカネの観察

菖蒲園ではマユタテアカネをネットで捕獲。顔の黒班や腹部先端が上に反っているなどの特徴を観察しました。

この日はラッキーなことに岸辺の竹製の柵に沿って 1 頭、また 1 頭、計 3 頭の雄を発見。雄同志の縄張りについても観察できました。しかも、講師の帽子に止るなど、マユタテアカネは実に協力的で観察会を盛り上げてくれました。

トンボは翅と翅の間に指を入れて持ち、観察を終えたと、釣った魚と同様に Catch and Release、放虫しました。

このほか昆虫では、コナラの樹液に飛来するオオスズメバチ。コナラやクヌギ、マテバシイなどを虫食うカシノナガキクイムシによる惨状（ナラ枯れ）も観察しました。



岸辺で縄張りを張るマユタテアカネ(雄)

●コモチシダの観察

斜面に生えるコモチシダを観察。暖地の斜面などに生える普通のシダ類です。葉の「無性芽」に注目して観察しました。



コモチシダの無性芽を観察

無性芽は、親のシダの葉の細胞から「子ども（無性芽）」が生長したものです。ということは、一旦は葉に分化した細胞が脱分化し、再び発生して子どもができたと考えられます。

その詳しい仕組みは分かりませんが、山中伸弥さんがノーベル賞を受賞した「iPS 細胞」に通じるものがあるのかもしれませんが。そう思うと、コモチシダって「凄い」と思いませんか。

●ススキと合掌造り、ナンバンギセルの観察

日当たりのよい斜面に生えるススキ群落。

ススキのことを茅（カヤ）ともいい、乾燥させて茅葺き屋根に使用します。生田緑地には白川郷から移築した築 200 年と言われている合掌造りの建物があります。その屋根を見ながら 40～50 年に一度の屋根葺き作業についても紹介しました。（実は、私は群馬の山村で囲炉裏のある茅葺き屋根で生まれ育ちました・・・）



築 200 年の合掌造りの古民家。茅葺きの急勾配の屋根に注目して観察



ススキの葉で紙が切れるか、悪戦苦闘中。右は葉のぎざぎざ部分の拡大

ススキは葉の縁が鋸のようにぎざぎざになっていて、これで手を切ってしまうことがあります。この日は紙を切る実演をしましたが、紙が丈夫だったためかうまくいきませんでした。



右の写真はススキに寄生するナンバンギセルの花と果実
上の写真はナンバンギセルの種子。大きさとその数に注目



ススキ群落では根に寄生するナンバンギセルの花や果実を観察。

黒いボードの上で枯れた果実を振ると、パラパラと黄色い花粉のような種子で出てきました。さてこの小さな種子、一体何個あるのか、数えて見たくなりませんか。

植物ではこのほかに日本固有種のスギ、ヤマトシジミが吸蜜するキツネノマゴなどを観察しました。

●ガビチョウが現れる

林内からガビチョウの鳴き声が聞こえました。5～6m 先でうるさいほど大きな声で鳴いているものの、なかなか姿を見せません。あきらめかけていた、そのときでした。クロマツの枝に一羽が飛来。逆光気味で、わずかに 30 秒くらいでしたが、全員で観察できました。ガビチョウは、漢字で「蛾眉鳥（画眉鳥）」。中国、台湾、ベトナムなどに自然分布。日本ではペットとして飼育していたものが籠抜けした帰化鳥です。



目の前の枝にとまったガビチョウ。目のまわりの模様が特徴的(写真:富岡浩一)

多摩丘陵や高尾山ではいたるところで鳴いていますが、千葉県には分布していません。参加者の中で千葉県在住者と多摩地区在住者とでは、ガビチョウに対する感じ方に温度差がありました。

「蛾眉鳥」の名は、中国では「夫婦仲のよい象徴」ですが、その意味については割愛します。

最後に枳形山展望台に昇り、関東一円の眺望を楽しみ、ほぼ予定通り 12 時 30 分ころに解散しました。

レポート作成：唐沢孝一